

# 作業所学会を振返って

研修部会長 安間孝明

今回のメインの講師は、済生会の炭谷茂先生でした。今回は、リモートによる学会を成功させるためにも先生の講演に問題が生じてはいけなさと、遠藤事務局長と共に収録に行きました。東京タワーが見える済生会の本部は、巨大な済生会病院を見下ろすビルの中にありました。元環境省の事務次官まで務められた超多忙の先生が依頼を承諾頂いた背景に増田先生のつなぎがあった事が大きな要因です。いつも増田先生には、連合会への応援の姿勢を崩さず、感謝致します。内容は、ソーシャルファームの歴史をイタリアのバザリア医師の取り組みから始まり、それが精神科病棟解体への画期的な動きとなり、法律名とまでなった劇的な話を分かり易くまとめられました。この取り組みがやがてヨーロッパに広がっていく様を自らが見察をされているために個人的には、大きなチャレンジを頂いたように思います。後日、調べて更に驚いた事にバザリア医師は、患者さんの犯した他害行為の責任を裁判で問われる事があり、大変な葛藤の末にこの運動を完成して行きました。想像を遙かに超える大変さがあつたらうと思えました。炭谷先生は、これを日本に根付かせようと努力されます。官僚時代から障がいのある人々への支援を個人的にもやっていた事のある先生らしく、粘り強くまた、環境省のキャリアや東京都知事との繋がりも大事にしながら、可能性を秘めた方々との連携を取りながら、一步一步前進して行かれました。その実践の報告は、北海道のジビエを利用した新しい取り組みや、静岡でも講演されたことがある多摩の草の根の会の風間さんを取り上げる着想に先生の視点を見た気がしました。今回、ソーシャルファームについて先生が語られる事を伺い、消化不良の方が出るので

はとも思いました。また、世界的には、福祉就労の場がなくなっている現実も明言され、皆さんはどう思われたのでしょうか。実は、収録の最後にいくつか先生に質問させて頂きました。「障がいの重い人々にとつて福祉就労の場は必要ではないでしょうか？」と伺いました。炭谷先生は、「必要です」と言われました。作業所学会は、あらゆる可能性をその形態においても受容する広さがある事が、特徴かと思えます。その意味で大変貴重な内容だったと理解しています。

また、分科会では、就労、地域生活、本人部会と分かれてましたが私は、地域に参加させて頂きました。グループホームでの生活のあり方を大橋さんの話から原点回帰を考えさせられました。うちの支援者には是非聞かせたい話が事例を交え、いくつも登場しました。また、就労に関して支援者のメンタルヘルスの事にも触れ、参加者が力をもらえたのではないかと思います。本人部会は、滝戸さんの常の話から伺えるように大変意味深い内容だったので良かったと思います。

全体ディスカッションの進行役を増田先生にお願いするのは、先生が作業所学会の羅針盤だからです。気心が知れた理事たちが顔を合わせると「一年に一回は、増田先生の話聞かないといけない」と話題になります。時には、辛口コメントで訓戒して下さり増田スマイルの中、原理原則を解いて下さる増田節を聞かなければ、学会は始まらないと本気で考えています。机上で終わらないのが作業所学会ですが、原点を大切にしている学会でありたいと思えます。前回コロナのために中止した事がこうして無にならず感謝でした。